

なお、大会の当日配布された発表資料は、以下の通りである。

【二〇一五年度 駒沢史学会大会発表要旨】

天孫降臨神話の司令神について

舟久保 大輔

天孫降臨神話とは天上世界の最高神が自身の子孫である皇孫に對して地上世界の統治者として降臨を司令するという神話である。また、天皇はこの天上世界の最高神＝司令神の子孫として位置づけられているので、司令神は天皇家の祖先神であり、天皇家の支配の正当性の思想的根柢となる最も重要な神であると言える。

ところで、天孫降臨神話は『古事記』『日本書紀』において内容の異なる神話が六伝収められているが、興味深いことにその司令神に注目するとタカミムスヒであったり、アマテラスであったり、あるいは二神並立であったりとその所伝によって違いが生じているのである。

このような各所伝における天孫降臨神話の司令神の違いの意義について、先行研究では司令神がタカミムスヒからアマテラスへ変化したということについては諸説一致している。ではその変化の時期や要因についてはどうか。これについては持統天皇がそれまで前例のなかった孫の文武天皇の即位を正当化するために、アマテラスを司令神とし、孫のホノニギを降臨させるという神話を創作したという説が多くの研究者によって唱えられている。

しかし、この持統天皇の皇位継承と司令神の変更の関係性については系図の齟齬など多くの問題がある。そこで本報告では、まず司令神の変更の時期について、持統天皇ではなく、天武天皇をその画期であることを指摘する。次に司令神の変更の要因については持統天皇の皇位継承との関係ではなく、天武天皇が志向した中央集権国家建設の一環として捉えるべきであることを指摘する。具体的に述べるならば、タカミムスヒは天皇だけでなく、他氏族の祖先神でもあったため、天武天皇が目指した天皇神格化や対外政策上、司令神として不都合であった。一方、アマテラスを司令神とした目的は在地の太陽信仰を天皇のもとに吸収し自身を神格化し、神的権威を持たせることにあった。

戦国大名武田氏の曹洞宗支配

長谷川 幸一

戦国大名武田氏の研究は、他大名に比べ、多くの研究成果が出されてきている分野といえる。しかしながら、宗教に関する研究については、基礎的事実さえ、明らかでないことも多く見受けられ、他分野の研究に比べ、まだまだ研究する余地が残っている。この点は武田氏研究に限らず、戦国史研究全体の動向としてもいえる。本報告で取り上げる武田氏の曹洞宗支配についての研究も多くの蓄積があるが、依然、その実態については不明な点がある。本報告では、戦国期の甲斐の曹洞宗に注目する。中世の甲斐に

において、最大の勢力を誇った仏教の宗派は曹洞宗である。その曹洞宗の門派中、もつとも多く甲斐において勢力を伸長させた門派は、峨山留碩の流れを汲む吾宝宗璿の門下、雲岫宗龍の一派になる。この一派は雲岫派と称される。近世になって、甲斐の曹洞宗門行政は、この雲岫派であった大泉寺と広厳院の二ヶ寺による相僧録制によつて運営される。なぜ、この二ヶ寺が僧録となつたのかについて、大泉寺は武田氏・浅野氏の菩提寺として、広厳院は雲岫派の派頭であつた寺院であつたため、僧録となつたものと考えられる。

しかし、近世以前の甲斐の僧録については、いまだ不明な点が多い。大泉寺は、天文年中より甲斐・信濃における僧録として武田氏に抜擢されていることが指摘される。その根拠は、近世に作成された地誌『甲斐国志』による記載によるものと思われる。しかし、具体的な検討については、まったくなされておらず、『甲斐国志』の記載が妥当なものであるかも不明なままである。

本報告では、戦国期、甲斐における曹洞宗寺院が武田氏とどのような関係を結んでいたのか。曹洞宗寺院は武田領国において、どのように存立していたのか。以上の問題について、関係史料の検討を通して、武田氏による曹洞宗支配を考察したい。

参勤交代と脇道通行——美濃路脇道を事例に——

宮川 充史

徳川幕府と諸大名の主従関係の象徴ともいえるのが参勤交代である。従来の研究は制度史を中心としたものであったが、近年では藩政史料や宿場史料を用いた考察が各地域で進められている。西国諸大名の参勤交代に使用される街道は多くは東海道と決められていた。本街道から外れた脇道の勝手な通行は規制されていたものの、実際には脇道通行が見られた。幕府が脇道通行の禁止を立案するきっかけとなつたのが、文政五年（一八二二年）の鳥取藩主の美濃路脇道通行であった。本報告では、この美濃路脇道を事例に、その数量や通行の理由について考察をする。

美濃路脇道は、東海道と中山道を結ぶ美濃路の脇道である。大垣藩の藩庁でもある大垣を避け、中山道赤坂宿と美濃路墨保宿を直接結ぶ道であった。この美濃路脇道が鳥取藩のみならず、他藩も幕府に無届で通行していた事実を知つた道中奉行は、老中水野忠成に大名等の脇道通行の禁止を上申した。水野は参勤時期の遅れや、道中の混乱を懸念して、理由のない脇道通行は規制するも、洪水等「無拠」事情によつては、脇道の通行を許すという姿勢で全面的な通行禁止までは決定しなかつた。

中山道赤坂宿、美濃路起宿の史料を中心に美濃路脇道の通行者を考察した結果、美濃路脇道通行は大名だけでなく、公家や御茶壺に及んでいたことが確認できた。大きな理由として、美濃路が洪水の多い輪中地帯を抜ける街道であつたことが指摘できる。美

濃路にとつて、美濃路脇道は必要な回避路であつた。その一方で、紀州藩の参勤交代では脇道通行が常例となり、幕末まで使用され、美濃路脇道が「紀州街道」と称された程であつた。また、雨季ではない時期にも脇道通行があつた。本道よりも脇道使用の方が距離が短く、人馬賃錢も安かつたことが背景にあつたと考えられる。美濃路脇道は洪水時の回避路としてだけでなく、紀州藩主の参勤交代の常道となり、美濃路のバイパス幹線となつていたのである。

御厩河岸渡船にみる江戸・東京の河川交通

齊藤 照徳

象

近世渡船研究では、東海道・中山道などの街道に位置する渡船を主な対象として、渡船に関する機能をみてその軍事的・政治的性格が検討された。対して、軍事面のみ把握を批判し、交通史的位置付けを明らかにすべきとして、渡船場自体の経営実態や地域産業と渡船経営との関連性など経済的観点からの研究も行われた。一方、渡船場の機能の本質は「渡河機能」であるとし、水運機能との両面で把握が必要との指摘などもあり、渡船研究は機能面の分析と実態解明の成果が蓄積されている。

しかし、こうした渡船の性格をめぐる議論は、対象の渡船が「街道に位置する」という立地条件から発生する側面をもち、あらゆる渡船に共通の問題とはいえない。なかでも多くの渡船が運航す

る江戸市中や近郊地域については、渡船を主要な河川通行手段として位置付け、その実態を解明することが江戸・東京の地域史研究の立場から求められる。

また、都市交通における渡河機能の「近代化」というテーマも検討しなくてはならない。この画期としては「渡船から橋へ」鉄橋の出現などがあげられるが、これは明治以降に直線的に鉄橋化するのではなく、大正期まではかなり多くの渡船が並列的に運航している。あわせて、鉄橋化の過渡期として、明治初期の木造橋の架設もみられる。その主体は民間事業者であり、こうした事例から明治初期の東京の都市交通の一端を解明する必要がある。

以上をふまえ本報告では、江戸市中という立地条件にある渡船として大川御厩河岸渡船を対象に、江戸市中への交通上の役割とその実態を明らかにする。あわせて『既橋架橋書類・甲』（東京都公文書館蔵）をもとに、同渡船の橋梁化についても検討し、民間架橋事業者の出願案を東京府・大蔵省が適正な入費消却計画へと修正させるという指導を行いつつも、基本的には民間による経営という方針を維持して架橋に至るが、一方で民間経営であるがゆえに、開橋早々に経営的困難に直面するという明治初期の渡河交通の事態と問題点について明らかにする。

カノポス容器から見る古代エジプトの死生観

小林 慧

古代エジプトの人々は来世の存在を信じ、死後には来世で現世と変わらない生活を送るという思想をもっていた。「死」というものを生命活動の終焉ととらえるのではなく、不可視である人物の「魂」は残るという思想は、古代から多くの人間にもたれてきた考え方である。古代エジプト人たちも現世での「死」は肉体活動の終焉であり、死後、来世で復活し生命活動が維持されると考えていた。しかし、来世で復活するためには墓の建築や数々の副葬品など様々な準備を整えておく必要があったのである。今回取り扱う副葬品のカノポス容器は、他の文化では見られない古代エジプト独自の副葬品の一つであり、また多くの出土例が確認されているものの、体系的な研究はいまだなされていないものである。そこで、本発表では古代エジプトの死生観について紹介し、副葬品の一つであるカノポス容器が古代エジプトの人たちにとってどのような意味を持っていたのかを考察し、明らかにしていく。

古代エジプト人の死生観は自然環境からの影響が大きく、それらには再生復活の要素が含まれている。「死」とは人の一生における一つの変化の点であり、命を失っても魂は別の場所（来世）で生き続けると考えていた。自然の循環と同じように、来世での再生によって人の生命も繰り返すという死生観につながったのである。本発表で扱うカノポス容器は、ミイラ作製時に摘出される四つの臓器を取めるアイテムである。それぞれの臓器を守護して

いる神々と、容器が壺の形態になるとその容器を守護する役目を持つ女神たちが存在する。また、容器の変遷形態は五段階に分けられる（布：第4王朝↓箱：第4王朝↓壺：第1中間期↓壺と箱：第18王朝↓空箱：第3中間期）。

多くの文化で見られる葬送習慣の副葬品に壺が付き物であるように、カノポス容器（壺）が時代の流れの中で古代エジプト文化を代表する副葬品のひとつになっていった。古代エジプトでは完壁に準備をしていれば、死は恐れるものではなく受け入れられるものであった。時代ごとにおける埋葬に関しての完壁さや、当時の人々が求めた完全な準備の中の細部への現れが見える副葬品こそがカノポス容器であったのである。

三浦半島における横穴墓の特異性について

——半島南端部を中心に——

川田 馨秋

本発表は、神奈川県三浦半島の横穴墓を総体的に研究し、半島という独特な地理的環境の下で活動したであろう横穴墓被葬者の性格について考察したものである。今回は、研究の第一段階として、三浦半島における横穴墓分布地帯の一つでもある、半島南端部（三浦市域）を対象とする。

前半は、三浦半島全域を対象とした研究が希薄であることを指摘し、横穴墓の形態・副葬品の様相を概観していく。横穴墓の形

報

態は、棺座や排水溝等の付帯施設が皆無であることを除けば、天井・墓室平面形態に特筆すべき点はみられない。副葬品については、異質なものととして「釣針」が挙げられ、神奈川県内でも三浦半島だけにみられる特異な副葬品であることが明らかになった。

後半では、横穴墓の副葬品の中でも特殊な部類に分けられる、「漁撈具」に焦点を当てていく。漁撈具の副葬は出土事例が少ないものの、古墳時代全般にみられ、横穴墓よりも古墳に副葬されるケースが目立つ。また、必ずしも沿岸部の古墳や横穴墓全てに副葬されるわけではなく、半島や島など海上交通の要衝となる場所に集中する傾向がみられる。漁撈具が副葬される横穴墓は非常に数が少なく、太平洋沿岸では三浦半島と房総半島でしか確認されていない。

象

漁撈具は、多量の副葬品の中に釣針やヤスが2〜3本だけ副葬されるパターンが多く、特に豊富な武器類との共伴事例が特徴的である。さらに三浦半島における漁撈具副葬横穴墓に関しては、馬具を除いて装飾付大刀を含む武器・土器・装飾品全てが副葬されている。

以上のような漁撈具副葬墓の様相から、被葬者は単なる漁民ではなく、海をフィールドとした多様な活動のなかで力を付けたものと推察される。三浦半島の横穴墓被葬者が、海を舞台にどのような活動を行っていたのかを考えていくには、多角的な視点での検討が必要となってくる。